第9回

石井至の世界放浪記

ゾルゲの故郷・アゼルバイジャン

今月は、アゼルバイジャンの続きの話を紹介しよう。前々号では、スパイ・ゾルゲについて書いた。

一九四一年、独伊と同盟を結び同時にソ連と中立条約をも結んだ日本が、果たして独ソ戦に参戦するのか否か。それがソ連の最大関心事だった。スパイ・ゾルゲは「当面、独ソ戦へ日本は参戦しない」という御前会議の情報を入手し、モスクワに打電した。ゾルゲのスパイ活動の最大の成果だ。

そして、そのゾルゲはアゼルバイジャンで生まれた。ソ連のスパイとして逮捕・死刑になったにも関わらず、一貫してソ連はゾルゲとの関係を否定してきたが、一九六四年にソ連によって名誉回復されて以降、バクー市内にゾルゲ公園という名の公園ができた。強烈な印象を与えるゾルゲのモニュメントが今もそこにある。

ドイツ人の父、ロシア人の母の間に生まれたゾルゲは、なぜアゼルバイジャンで生まれたのか。実は、そこにあのノーベル賞のアルフレッド・ノーベルが関係していると言うと読者は驚くだろうか。

今も昔も、アゼルバイジャンと石油は切っても切れない関係だ。

紀元前からバクーでは石油が採れていたらしい。今でも、バクー郊外のヤナルダー（燃える山の意味）というところでは、染み出る石油によって地面が燃えている。拝火教（ゾロアスター教）の教祖ゾロアスターが現在のアゼルバイジャンで生まれたという説もあるくらいだ。

一九世紀後半に、アメリカのロックフェラーによる石油産業の近代化の波はバクーにまで達し、外国人による石油開発が進んだ。

一八七五年には、後にノーベル賞を創設したアルフレッド・ノーベルとその兄弟ロバートとルードウィッグがバクーに進出し、一八七九年にノーベル兄弟石油会社を設立した（通称、ブラノーベル社）。後にロイヤルダッチシェルになるロスチャイルドも、同時期にバクーに進出している。

ブラノーベル社が飛躍したのは、ルードウィッグの息子、エマニュエル・ノーベルが経営者になってからだ。二十世紀初めには、バクーの石油生産量は全世界の約半分を占めるまでになったほどだ。

しかし、歴史の気まぐれか、一九二〇年にはロシア革命がバクーにまで及び、ブラノーベル社はボリシェビキによって国有化された。当時、世界有数の私企業にまで発展していたブラノーベル社は一瞬のうちに事実上消滅したのだ。

ただ、面白いのは、実は、ノーベル家は一九二〇年の国有化直前に、その株式の約半分をロックフェラーのスタンダードオイルに売っていたことだ。それによってノーベル家の資産は保全されたらしい。

また、死後に遺言によってノーベル賞を創設したアルフレッド・ノーベルは、ブラノーベル社の大株主であった。アルフレッドの死後、彼が所有していたブラノーベル社の株の処分によって得たお金が、ノーベル賞の賞金の原資の何分の一になったと言う。

大物スパイ誕生の背景

ブラノーベル社がどれだけ大きな会社であったのかは、ブラノーベル社の施設を引き継いだソ連が一九四一年に世界の石油生産の約七割を占めていたことでもわかる。

それだけ、一九世紀の終わりから二十世紀にかけて、バクーは、ゴールド・ラッシュならぬオイル・ラッシュで盛り上がっていた。そして、そのバクーには世界中から一攫千金を夢見て人材が集まってきた。

スパイ・ゾルゲの父ウィルヘルムもその一人だ。ウィルヘルムはブラノーベル社に高給で雇われた石油採掘技師だった。彼ぐらいの技師は、数年、バクーで働けば立派な家が建つほどのお金を貯めることができたという。

バクーで数年を過ごしている間、一八九五年にゾルゲはバクーで生まれた。その後、ゾルゲが三歳のときに一家はドイツに戻り、ブルジョア家庭となった。

ワイマント氏が書いた「ゾルゲ・引き裂かれたスパイ」（新潮文庫）によると、バクーでの経験が、ゾルゲにスパイになる萌芽を与えたようだ。

「ゾルゲ一家は、隣人たちより広い視野を持っていた。カイゼル・ウィルヘルム治下のドイツ帝国の、向こうにある世界を見知っていたからだ。父は仕事のためにほとんど海外ですごしていた。母ニーナ・コベレフはロシア人だった。ゾルゲ自身も帝政ロシアの辺境で生まれていた。（中略）ゾルゲ一家はいっぷうかわっていた。」と書かれている。ゾルゲはその後、ドイツ共産党に入党し、さらにソ連共産党に入党しモスクワに引っ越す。

思考や行動の型破りなスパイ・ゾルゲが生まれた背景には、バクーの石油があり、ノーベル兄弟がいた。そして、そのゾルゲが第二次世界大戦中の日本を震撼させたのだ。

世界は思いもよらない糸で結ばれている。

石井　至（いしい・いたる）

昭和四十年、北海道生まれ。東京大学医学部卒。フランス系のインドスエズ銀行を経て、平成九年に石井兄弟社設立。同社代表取締役。金融ハイテク技術コンサルタントを行う他、東京にて幼児教室「アンテナ・プレスクール」を主宰。